

学びを育む地域文庫の歴史

—和光市における西大和団地と諏訪原団地を中心に—

中岡 貴裕・石川 敬史

1. 研究の視角と目的

ポストの数ほど図書館を

かつて東京都杉並区で「かつら文庫」を開設し、海外の児童文学作品の翻訳をはじめ、児童文学作品の批評や文庫活動の実践など、地域の子どもたちと本をつないだ石井桃子の言葉である¹。石井桃子の活動は、各地における家庭文庫や地域文庫の広がりとともに、公立図書館の設置と児童サービスの豊かな実践に結びついたことは知られている。地域文庫とは、「地域の自治会や町内会、PTA、有志グループなどが組織的に設置し、運営する子ども文庫」²であり、家庭文庫とは、「個人の篤志家が自宅を開放し、自己所有の児童図書を貸し出す形態の子ども文庫」³である。こうした地域・家庭文庫の活動や公立図書館における児童サービスの戦後史は、汐崎順子⁴や吉田右子⁵によって検討されているほか、近年では高橋樹一郎⁶が「子ども文庫」の歴史を整理し社会的意義を論じているとともに、竹内愨⁷も地域における図書館のあり方をたどる中で、石井桃子の活動や地域・家庭文庫の活動やネットワークを評価している。

また、藤本浩之輔⁸は子どもの遊びを論じる中で地域・家庭文庫の役割に触れているほか、磯井純充は自身が推進する「まちライブラリー」を論じる中でもこうした文庫に触れている⁹。戦後日本の地域図書館の歴史の中において、地域全体で子どもの読書環境をつくり、大人も子どもとともに学びあった地域・家庭文庫の活動が大きく位置づけられているとともに、社会教育や子どもの遊び、まちづくりとして図書館活動が実践されるプロセスにおいても、これらの文庫が評価されている。

埼玉県の南部に位置する和光市においても

大規模団地の建設や子どもの増加を背景に、1960年代半頃から地域文庫が各地で設置され始めた。これまでに調査を重ねた和光市を中心とする戦後移動図書館史研究¹⁰の過程においても、とりわけ団地自治会による地域文庫や読書会活動と、図書館や移動図書館活動が交差していたことが明らかになっている。例えば、埼玉県立浦和図書館の一日図書館「むさしの号」の巡回に当たり、地域文庫や読書会を担う女性らがステーションの設営の担い手にもなっていたことをはじめ、団地において地域文庫を担う住民らが和光市の移動図書館を求める運動の起点になっていたこと、さらには中央公民館図書室からこれら文庫に対して団体貸出による支援などが行われていたことなどが明らかになっている。

すでに戦後における団地と社会教育については、数多くの実践報告や論考がある。例えば久井英輔¹¹が高度成長期における団地と社会教育との議論を整理しているほか、上野景三¹²は都市近郊団地に関わる社会教育学や建築学の研究の系譜と成果を整理し、社会教育学研究の課題を提起している。戦後の団地の歴史研究については、原武史¹³が戦後思想史の視点から首都圏郊外の団地を対象に鉄道インフラが住民の意識を規定していることを実証的に明らかにしているほか、総中流の始まりという視角から渡邊大輔ら¹⁴が団地の生活時間を研究対象にしている。かつては倉沢進ら¹⁵による都市社会学研究の立場から生活様式やコミュニティに関する実証研究も盛んに行われていた。総じて戦後の団地に関わる社会教育研究や歴史研究においては、高齢化と建物の老朽化という現代的課題を背景に、「学び」を軸とした地域社会教育としてのあり方や、地域再生（団地再生）とまちづくりをはじめ、戦後日本の社会形成過程において団地に集う人々とその空間が大きな影

響を及ぼしたという問題意識があろう。その一方で、公立図書館と団地に関わる歴史的な分析や考察は、かつて団地に設置された地域文庫とのかわり¹⁶を除き、十分にみることはできない。

こうした研究視点と問題意識を背景に、本稿では埼玉県内で早期に開設された和光市における西大和団地と諏訪原団地における地域文庫や読書会活動を対象に、文庫開設の経緯や活動の歩みを明らかにするとともに、公民館図書室や公立図書館、移動図書館との関わりを踏まえることによって、地域における文庫活動が果たした役割と意義について再発見することを目的とする。そのため本稿では、西大和文庫（ありんこ親子読書会）と諏訪原文庫において活動を担っていた地域住民の方々へのインタビュー調査記録を中心に、関連資料も用いながら実証的に検討する。なお本稿で掲載したインタビュー記録については、紙数の関係から内容を整理・抜粋するとともに、年表記は西暦で統一している。インタビュー記録の詳細は、今後本研究の報告書としてまとめる予定である。

2. 団地と移動図書館・地域文庫

2.1 団地建設と人口の増加

埼玉県は1950年代後半から人口増加が目立つようになり、1960年に入るとその傾向は一層著しくなった。1965年には年間人口増加率は戦後最高の約7%に達し、1970 - 1975年にかけての人口増加率は24.7%に及び、全国第一位の増加率を示した¹⁷。人口が急増する中で埼玉県内には多くの団地が建設されていく。

和光市（大和町）においても、1964年8月に日本住宅公団によって西大和団地の建設が始まり、1965年3月に第一期工事、同年6月に第二期工事が完成した¹⁸。その翌年に当たる1966年1月に日本住宅公団は諏訪原団地の建設も開始し、同年10月から同団地への入居が始まった¹⁹。こうして「西大和団地と諏訪原団地という二大団地が相次いで建設され、大和町の様相は大きく変化」し、1966年の人口は「対

前年比で25%増という驚異的な増加率²⁰を示した。人口の急増に伴って、都市基盤や公共施設整備の遅れが顕著となり、なかでも教育施設の整備は「緊急かつ深刻な問題」²¹であった。1971年には総合会館の完成に伴い中央公民館図書室が移転開設しているが、その翌年に当たる1972年度の一般会計当初予算を見ると、予算全体のうち教育費が占める割合は30.7%に及び、その内訳としては小学校費（66.7%）と中学校費（19.2%）が大半を占め、社会教育費の占める割合はわずかに6.2%であった²²。

2.2 県立図書館による移動図書館の巡回

県南部を中心とする大規模団地急増に対して、埼玉県立図書館では500戸以上の中高層集団住宅地を対象に、大型バスを改造した約4,500冊積載可能な一日図書館「むさしの号」の巡回を1972年1月に開始した²³。埼玉県立図書館による移動図書館の和光市への巡回については、すでに1962年から「むさしの号」（約800冊積載）が和光市中央公民館へ巡回していたが、1971年5月になると新たなステーションとして新倉小学校、西大和団地、諏訪原団地が加わっている²⁴。そして翌年の1972年1月には、西大和団地と諏訪原団地がこの一日図書館のステーションとして位置づけられた（図1、図2）。

こうした県立図書館による移動図書館の巡回が契機となり、「県立依存型ではなく、市内各地域での身近な駐車場でサービスを受けることによって、地域的な不均衡と不平等を解消しよう」と呼びかけられ、「和光市に移動図書館をつくる会」が発足し、移動図書館を求める活動に結びつくこととなった²⁵。その活動の中心は団地に居住し、団地内において地域文庫の活動を担っていた女性らであった。

2.3 埼玉県と和光市における地域・家庭文庫

埼玉県内における地域・家庭文庫の開設状況についてみると、図3のとおりであり、1970年代から急増していることがわかる。1981年9月現在においては、県内に196の文庫があ

BM名	ステーション名	S37年度 (1962)	S38年度 (1963)	S39年度 (1964)	S40年度 (1965)	S41年度 (1966)	S42年度 (1967)	S43年度 (1968)	S44年度 (1969)	S45年度 (1970)	S46年度 (1971)	S47年度 (1972)	S48年度 (1973)	S49年度 (1974)	S50年度 (1975)
県立 むさしの号	大和町中央公民館	8月から													
	新倉小学校										5月から				
	諏訪原団地										5月から				
	西大和団地										5月から				
	南大和団地											4月から			
	白子小学校												4月から		
一日図書館	諏訪原団地										S47年1月 から		S49年2月 末で廃止		
	西大和団地										S47年1月 から				S51年3月 末で廃止

図1 埼玉県立図書館による移動図書館ステーション変遷（和光市内）



図2 埼玉県立図書館による移動図書館ステーション位置図（和光市教育委員会生涯学習課提供の現況白図を基に作成）

ったことが報告されている²⁶。

和光市内における地域・家庭文庫の設置状況については、1981年9月現在、8カ所設置されていた記録が残されている(表1)。このうち、1964年に開設したとされる西大和団地自治会文庫が最も古く²⁷、1968年開設の諏訪原団地地理学会文庫と続く。西大和団地自治会文庫は埼玉県内でも2番目に古い文庫であり、「瀬田文庫(昭和32年)西大和自治会文庫(昭和39年)は特筆されよう」²⁸と指摘されている。同時に、諏訪原団地地理学会文庫も県内では5番目の古さであり、両文庫は古い歴史を有し、埼玉県内における地域文庫の先駆けと位置されていたことがわかる。

これらの地域文庫に対して和光市の中央公民館図書室は、埼玉県立図書館による貸出文庫の利用案内を周知²⁹するとともに、1972年7月からは中央公民館図書室による貸出文庫として、地域団体に対する貸出を開始した³⁰。とりわけ埼玉県立図書館による貸出文庫をとおして行われた地域文庫に対する支援が「市の公民館をとおしておこなわれたので、文庫と公民館のつながりができるようになり」³¹、それが後述する「ありんこ親子読書会」の発足にきっかけを与えた点は特筆することができる。

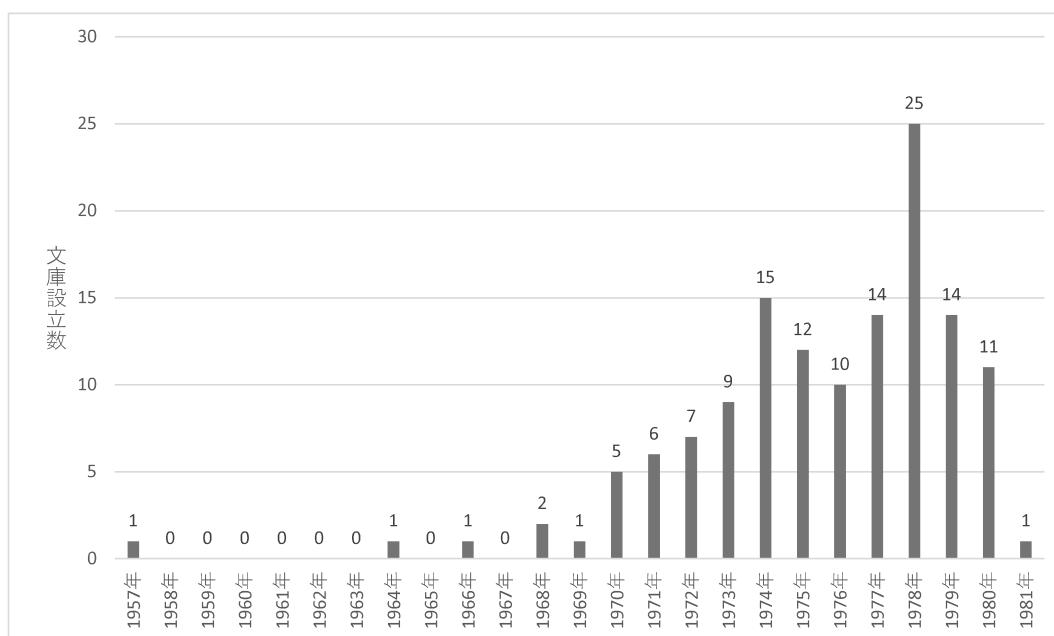


図3 埼玉県内の地域・家庭文庫の年別新規設立数 (1957-1981年)

(全国図書館埼玉大会実行委員会編『埼玉の移動図書館』1981を基に作成)

文庫名	開始年月日	所在地 ※番地以降は省略	世話人数	会員数	蔵書冊数	会費	備考
ありんこ親子読書会	S46	和光市西大和団地2	17	39世帯 57人	134	月100円 年1,200円 (世帯)	
しらこぼと文庫	S52.5	和光市白子2	2	120	1000	無	
諏訪原団地地理学会文庫	S43.7.27	和光市諏訪原団地集会所	32	団地居住者	1480	無	理事会より10万円
なかよし文庫	S54.7	和光市白子2	16	110	400	無	
西高島平スカイハイツ自治会文庫	S53.1.21	和光市白子3	3	75世帯	250	無	
西大和自治会文庫	S39.?	和光市西大和団地	52	860	1644		
ひまわり文庫	S51.6						
たげのこ文庫	S51.12						

表1 1981年現在の和光市における地域・家庭文庫

(全国図書館埼玉大会実行委員会編『埼玉の移動図書館』1981を基に作成)

3. 西大和文庫と「ありんこ親子読書会」

3.1 西大和団地と西大和文庫

西大和団地の建設は1964年8月に日本住宅公団によって始まり、1965年3月に第一期工事、同年6月に第二期工事が完成した。鉄筋五階建41棟、収容世帯数は1,427戸であり、「当時の東武東上線沿線では上福岡につぐ大団地」であった³²。この西大和団地に地域文庫（団地文庫）として西大和文庫が開設され、団地住民向けに本の貸出等が行われていた。西大和文庫の設立経緯については川久保武子が以下のとおりまとめている。

四〇年六月に入居開始をした団地で、カークラブや、野球部などというサークルはすぐにできたのですが、文化的な集まりはなかなかできませんでした。

そんなときに、自治会文庫の設立を願う母親たちが手をとりあって、文庫設立を提案し、みんなに呼びかけを始めました。

最初は寄贈本で、わずかな蔵書でスタートした自治会文庫も、その後、県立図書館から児童の団体貸し出しをうけられるようになり、だんだん充実されてきました。

この団体貸し出しが、市の公民館をとおしておこなわれたので、文庫と公民館のつながりができるようになりました³³。

川久保の記録によると、西大和文庫が開設されたきっかけは母親たちの呼びかけによるものであり、その願いが結実して設立されたことがわかる。

3.2 活動の目的

西大和文庫が開設されたことをきっかけに、その活動はさらに広がりを見せ、「ありんこ親子読書会」が誕生することとなる。先の西大和文庫同様に、川久保によってその詳細が記録されている³⁴。

“新しい子どもの本”を手にした母親の

なかから、“子どもの本”のことについて学びたいという要求が生まれ、公民館側がそれを受けとめて、四九³⁵年六月から十二月にかけて、西大和団地集会所で、「親と子のための児童文学を読む会」を開催することになりました。

……（略）……

この講座の受講者は、約一〇〇名にもおよび、そこで学んだ母親たちが、学習したことを実践にうつす場として、四六年四月、次のような申しあわせ事項をつくり「親子読書会」が生まれました。

○目的として

1. 読書をとおして、親と子の交流をはかり親子読書をひろめ、深めていきます。
2. 未来に生きる子どもたちに、よい本にめぐり合わせたいと願います。
3. 集団の中で、子どもの多面的な認識を育てたかめ、豊かな夢や、未来の展望をきりひらく創造力を身につけさせたいと願います。
4. どの子どもにも、楽しい読書の場が与えられるよう力を合わせます。

○活動としては

1. 親子読書会の開催、家庭での親子読書の交流
2. 子どもの生活と、子どもの本の研究
3. 親子読書会だよりの発行
4. 学級、自治会文庫、公共図書館関係の人たちと手をつなぎ、読書施設の整備、充実に力を合わせる。

ありんこ親子読書会の活動は発足後活発に行われ、当時の埼玉新聞（1978年8月1日）においても「すばらしい成果を上げている」と報道された³⁶。

こうした「会の目的及び活動」は、第十三回（1983年）から第十六回（1986年）までの総会資料の記録によると、同一の内容であったことがわかる。「第十三回西大和ありんこ親子読書会総会資料（1983年7月18日）」³⁷によると、

同会の目的及び活動は以下のとおり記録されている。

目的

- ・読書を通して親と子の交流をはかり親子読書を深めていきます。
- ・未来に生きる子どもたちによりよい本にめぐり合わせたいと願います。
- ・集団の中で多面的な認識を高め、豊かな未来の展望をきりひろく想像力を身につけさせたいと思います。
- ・どの子にも楽しい読書の場が与えられる様に力を合わせます。
- ・「親子読書・地域文庫連絡会」と「日本親子読書センター」に団体加入し、会の発展をはかります。

活動

- ・親子読書会の開催
- ・家庭での親子読書の交流
- ・子どもの生活と子どもの本の研究
- ・会誌「ありんこだより」の発行
- ・自治会文庫の管理運営に協力
- ・学校、地域の読書会、文庫、公共図書館関係の人たちと手をつなぎ読書施設の整備充実を力合わせる。

これらは川久保が記録した1971年の発足当時の「申しあわせ事項」とほぼ同内容であるため、同会の基本的な姿勢は担い手によって継承されているといえよう。ありんこ親子読書会の活動については、ほぼ毎月発行されていた会誌『ありんこだより』に記録されている。ここには、イベントや当番の予定など各種連絡事項をはじめ、様々な事業の報告や子どもたちの感想など多岐にわたる内容が記されている³⁸。

3.3 インタビュー調査

西大和文庫と「ありんこ親子読書会」の活動について、当時の状況や活動内容についてお話をうかがわせていただいた。なお、本稿においては、特に断りのない限り「西大和文庫」については「文庫」、「ありんこ親子読書会」については「ありんこ」と表記している。

(1) インタビュー概要

- ・調査日時：2019年12月15日（日）
10:00 - 12:30
- ・場所：和光市図書館会議室
- ・協力者：
桐田光枝（元ありんこ親子読書会）
鈴木真由美（元ありんこ親子読書会）
佐藤あゆみ（元ありんこ親子読書会 ※当時、子どもとして活動に参加）
- ・聞き手：中岡貴裕、石川敬史
- ・オブザーバー：小林理恵（和光市図書館長）

(2) 西大和文庫の運営について

中岡：『埼玉の移動図書館1981』³⁹によると、「ありんこ」は1971年に始まったようです。そして、西大和団地の自治会文庫は1965年から開始されていたようです。

桐田：その自治会文庫というのが、我々が「ありんこ」として運営を引き継いだ「文庫」のことだと思います。西大和団地には西大和文庫という団地の文庫がありました。団地の集会所の大きなお部屋の隣に「文庫」の部屋があって、絵本や紙芝居などの本が1,500冊ほどあり、毎週土曜日の午後に開いていました。「文庫」の本は子どもたちに2週間、貸出することもできました。土曜日に貸出をして、「2週間後の土曜日に返してね」といって紙に名前を書いてもらって。本の購入のお金は自治会から出してもらってました。「文庫」の運営は、「ありんこ」から一人、自治会内で1年ごとの持ち回りの役員である図書部、文化部からそれぞれ一人ずつ選出してもらって運営していました。それが、途中から団地の役員からの選出が無くなり、「ありんこ」が「文庫」を引き継いで運営する形になったと思います。

……（略）……

中岡：「文庫」と「ありんこ」というのは、同じメンバーで運営していたということでしょうか？

桐田：そうですね、同じです。ただ、私たちが入る前はどうかかわからないですが、私たちが入った時には、「西大和文庫はありん

こ読書会が運営する」ということになっていました。必ず一人は貸出の机にいて子どもたちとお話ししたりして、楽しかったですね。

(3) 西大和文庫の蔵書

中岡：「文庫」の蔵書はどのように購入していたのでしょうか？

鈴木：年に1回ですね。自治会からお金をもらって、それを使って購入していました。

桐田：数人で「今年はどんな本を買おうか」と話し合いながら買いに行きましたね。あの頃はインターネット環境がないから、クレヨンハウスに買いに行ったりして。

石川：現物を見て購入されていたのですね。

桐田：だから、選び抜いて買った良い絵本がたくさんありましたよ。

中岡：どのような分野の本が多かったのでしょうか？

桐田：ほとんど絵本と児童書と紙芝居でしたね。大人向けの本はなくて、子ども向けの本だけでした。本棚に入りきれないくらいありましたね。

鈴木：図鑑とかもあったよね。

桐田：ありましたね。小学校6年生くらいまでの子どもが読むような本がそろっていました。

……（略）……

中岡：本の並び方というのは、どのような順番で並べていたのでしょうか？

桐田：大きく分けて、絵本の棚と、小さい子用の本がある棚と大きい子用の本がある棚というように分けて、児童書は児童書、紙芝居は紙芝居というように並べていました。

中岡：名前順とかではなく？

鈴木：名前順ではないですね。コーナーで分けて、あとは大きさとかでそろえていました。

桐田：本棚も高さがそれぞれあるから、背の高い本と低い本は本棚に合わせて置いたりしました。さすがに図書館のようにきっちりした番号管理などはできなかったですね。壁一面に本があって、1,500冊くらいありました。

(4) ありんこ親子読書会の活動

桐田：「ありんこ」は、「文庫」に合わせて月に2回活動していました。一人が「文庫」の受付をして、他のお母さんたちは毎回順番で各自が選んだ本や紙芝居を子どもたちに読み聞かせをしていました。その後、工作やゲームをしたりしていました。だいたい2時間くらいですね。季節に合わせて色々な行事も親子でしてきました。春にはヨモギをつんでヨモギ団子づくり、七夕には七夕飾りをつくったり、どんぐりのコマをつくったり、クリスマス会や影絵の制作やクレープをつくったり豚汁をつくったりと色々なことをしていました。たまにはキャンプに行ったり、水族館やミカン狩り、昭和記念公園や植物園に行くこともありました。

鈴木：クリスマス会のこととか、すごく思い出すよね。影絵をつくったり……。

佐藤：ここにあるスイミーの影絵は、小学生の頃に作ったものですね。

桐田：そういうノウハウを図書館から教えてもらって、私たちはそれを「ありんこ」に持ち帰って活動していましたね。色々なことをやりましたね。

佐藤：新聞紙のプールをよく覚えていて、一番楽しかった思い出がありますね。たしか、福音館書店の『しんぶんしでつくろう』⁴⁰という絵本があって、それを参考に家をつくったりプールをつくったり……。

鈴木：新聞紙のプールをつくったことは、自分のこどもに聞いたらすごくよく覚えていましたね。

佐藤：福音館書店の『かがくのとも』のシリー



写真1 インタビュー当日の様子

ズに沿って遊ぶことが多かったように思いますね。

桐田：いわさきちひろ美術館に行ったこともありましたね。本に関するものを実際に見に行くということで、植物園に行ったりもしました。

……（略）……

石川：「ありんこ」のお楽しみ会などの活動は、団地の集会室で行っていたのですか？

桐田：そうです、団地の集会室ですね。絵本を読むときは、お母さんによってレパートリーが色々違うんですよ。好みが色々あるから、聞く方は楽しかったんじゃないかなって思います。だいたい1人2-3冊読んでましたね。それで2-3人が読んだら、その後は工作をしたりとかゲームをしたりとかしていました。

石川：その日に読む人は、その場で決めた感じでしょうか？

桐田：次回は誰が読むかはおおむね決めてました。クリスマス会の時などは、みんなで何をやるか事前に考えて大変でした。「子どもたち主体で何かつくらせてあげたい」という気持ちはずがまずあったから、必ず何かつくってましたね。

佐藤：つくってたね。すごく楽しかった。それでつくったものを、子どもたちが子どもたちの前で見せるんだよね。それでお土産もついできたりとかして。

(5) ありんこ親子読書会のメンバー

石川：みなさんが「ありんこ」に出会ったきっかけは？

桐田：気の合うお母さん同士で集まっているときに、「ありんこ」のことを教えてもらって、それで一回行ってみたらすごく楽しかったので入りました。みんな良い人たちでした。今でも会えばその頃の話で盛り上がりそうですね。

石川：メンバーが入れ替わったりということは無かったということでしょうか？

桐田：一回入った人が、入れ替わりのためにやめるというものではなかったですね。

中岡：「ありんこ」のメンバーは、どんどん追加されていくという感じでしょうか？

桐田：そうです。だからクリスマス会なんかも、小さい子のグループと大きい子のグループで出し物を別々にするということもありました。

佐藤：子どもの参加は自由だから、DIK マンションのお友達が参加したということもあったと思います。気に入った子は、何回も遊びに来ることがありました。

桐田：やはり本が好きだったりする子が集まりやすいのだと思います。集まった人は、みんな楽しみながら活動していましたね。

(6) 広報活動

石川：団地内での広報はどのようにされていたのでしょうか？

桐田：チラシをつくりましたね。団地の中に『自治会ニュース』というものがあって、そこに必ずクリスマス会やお楽しみ会のお知らせも載せていました。

中岡：『自治会ニュース』というのは、掲示板に掲示するものでしょうか？

鈴木：掲示板に貼っていたんじゃないかな。

佐藤：各棟に掲示してあったと思います。

桐田：それで、お楽しみ会なんかは20人くらい集まったりしましたね。

鈴木：お母さんが来なくても、子どもだけで来たりということもありました。

桐田：団地内だから危なくななく来れるというのも良かったのではないかと思います。

石川：「ありんこ」独自の広報誌などはありましたか？

鈴木：ありました。

中岡：『ありんこだより』でしょうか？

桐田：そうです！『ありんこだより』です。何冊もつくりましたよ。あれは楽しかったですね。よく中央公民館に刷りに行きましたよ。

鈴木：輪転機を使って刷ってたね（笑）。

中岡：それは、1枚のチラシというのではなくて冊子ということでしょうか？

桐田：そうです。

中岡：誰に配っていたのでしょうか？

桐田：ほとんど「ありんこ」内で配っていましたね。「ありんこ」用の広報という感じです。私はイラストを描いた記憶があります。

鈴木：いろんな本の紹介とかしてなかった？

桐田：あったかもしれない。親向きの内容が多かったよね。

鈴木：うん、子ども向けの内容では無かったよね。今考えたらとても大変そうだけど、よくやっていたよね。みんな好きだったのよね。

(7) ありんこ親子読書会と西大和文庫の終焉

中岡：「ありんこ」はどうして終わってしまったのでしょうか？

桐田：団地の集会所の建て替えがきっかけでした。その頃には図書館が充実してきたこともあって、団地の「文庫」で借りる子も少なくなってきました。それで、その分のスペースを空けたいという団地側の要請があって、「文庫」を閉じることになりました。

石川：そうだったのですね……。

……（略）……

石川：団地の「文庫」が無くなってしまふことについて、反対される方とかはいらっしゃらなかったでしょうか。子どもの数が少なくなってきたことも関係するかもしれませんが……。

桐田：「文庫」を閉めるころは、「文庫」自体を知らない人も多かったのかもしれませんが……。

鈴木：お母さんが忙しくなってしまったのかもしれないね。

桐田：確かに、共働きの人が多くなってきましたから、土曜日でも忙しくなってしまったのかも。専業主婦は少なくなりましたね。

佐藤：あと、子どもは成長してしまいますから、新しい人が入ってこないと子どもの数が減ってしまいますよね。それで減っていったんじゃないかなという気がします。

桐田：今はいろんな国籍の人も団地に入居してくるようになりました。

中岡：最後にお別れ会のようなものはされたの

でしょうか？

桐田：やりました！

鈴木：みんな高校生になった子たちもたくさん集まったんですね！

桐田：最後はみんなで「クレープパーティーをしよう！」とあって、最後だから卒業生たちに声をかけました。

4. 諏訪原文庫と「たつの子親子読書会」

4.1 諏訪原団地と諏訪原文庫

諏訪原団地は日本住宅公団によって1966年1月に第1期の建設が開始され、翌年に第2期、さらにその翌年に第3期の建設が行われ、入居は1966年10月から始まっている⁴¹。諏訪原団地には団地集会所の洋室に諏訪原文庫があり、現在も運営されている。その開始は1968年に遡り⁴²、現在は、蔵書数約3,500冊、毎週日曜日10:00 - 11:30に貸出が行われ、団地の居住者はだれでも利用することができる⁴³。

諏訪原団地で活動していた読書会として、川久保は「たつの子親子読書会」を紹介している⁴⁴。「たつの子親子読書会」ができたきっかけは、和光市中央公民館で1971年に開催された第二回「親と子のための児童文学を読む会」⁴⁵で、第一回の受講生が西大和団地の「ありんこ親子読書会」で素晴らしい活動をしていることを知ったこと等を挙げている。「ありんこ親子読書会」に比べ、たつの子親子読書会は、ちいさなんびりした親子読書会であったとされ、その活動は「学級のなかの自主サークル」というもので、先生（教員）を含めた活動であり、「ありんこ親子読書会」が西大和団地で活動していたのに対し、「たつの子親子読書会」は公民館、団地集会所、地域集会室、学校教室などを使用するものであったと報告している⁴⁶。

4.2 インタビュー調査

「諏訪原文庫」の歴史と現在の活動について、お話しをうかがわせていただく機会をいただいた。なお、本稿において特に断りのない限り「諏訪原文庫」については「文庫」と表記した。

(1) インタビュー概要

- ・調査日時：2020年10月17日（土）
13：30-16：30
- ・場 所：諏訪原団地集会所（諏訪原文庫）
- ・協力者：
坂井和子（諏訪原文庫世話人）
大谷鐵子（諏訪原文庫有志）
- ・聞き手：中岡貴裕、石川敬史

(2) 諏訪原文庫の運営体制

中岡：諏訪原文庫の運営体制は、有志当番と評議員による体制ということですが、具体的にはどのようなもののでしょうか？

坂井：せっかくこれだけある設備や組織をぜひ続けていきたいと管理組合の理事さんに相談して、今の体制があります。諏訪原団地は委託管理ではなくて自主管理なんです。1年任期で毎年各棟から1名ずつ理事が、各階段の縦10軒から1名ずつ評議員が出て運営されています。福祉担当の理事2名と評議員二十数名が文庫の運営に直接関わっています。「福祉」の評議員として来ていただいている方は、文庫の当番は年に2回くらい担当していただくことになります。有志当番は自発的にお手伝いしてくださる方々ですね。

中岡：元々は有志当番だけだったものが、後に評議員が加わったということでしょうか？

坂井：そうです。評議員が加わったのは、ずっと後の話ですね。はじめはずっと有志のみで行っていました。評議員というもの自体はありましたが、福祉の評議員が文庫の当番に加わったというのは、比較的最近の話ですね。

中岡：有志当番というのは入れ替わりがあるというよりも同じ方々が続けているのでしょうか？

坂井：有志当番には新しく入られる方もいますが、「有志」というように自発的に入られる方々ですね。そうした方々にはそれぞれ色々なきっかけがあります。例えば評議員として文庫の当番をしてみたら意外と良かったということで入られる方もいます。

……（略）……

坂井：当番のやることについては手順書のようにまとめたものがあります⁴⁷。管理組合の予算などは年度で区切られますが、毎年理事や評議員さんが変わるのは3月、4月ではなく5月後半の総会となっています。新しい方でも見ればわかるようにまとめてあります。

(3) 諏訪原文庫の蔵書管理

坂井：このノート（写真2）に蔵書の貸出のことがまとめてあります。昔、大和町時代の中央公民館図書室から借りてきた本の書名なども記載してありますね。

石川：貸出の統計なども記録されていて……、とても貴重な資料ですね。

坂井：ここに記載されている諏訪原文庫の本は、最初は家庭から持ち寄られた本が中心でした。

……（略）……



写真2 諏訪原文庫で使用しているノート（貸出記録簿）

石川：このノートに書かれている記録は1975年からとなっていますが、それ以前は同じようにノートで管理されていたのでしょうか？

坂井：これより前は、家庭から持ち寄られた本を中心にしていたと思うのですが、残念ながら記録がないのでわからないんです。公民館図書室から公共の本を借りることになって、大事な本だからということでこういう記録をつけはじめたのかもしれないね。

石川：なるほど。

坂井：このノートは、慣れてくればいいのですが、それまでは本を探すのが大変でした（笑）。図書館でつけられた番号順に並べられているのですが、私たちが探すときは書名でしょ？

ですから少し大変でした。当時は本が少なかったから、なんとなく覚えていたものでざっと見渡せばなんとか探せましたが、今はこれだけ蔵書がありますからさすがに覚えられませんね（笑）。

(4) 貸出・返却・督促・装備・配架

坂井：今はこのようにカードで貸出をしています。先週借りた人、それ以前に借りた人などを入れる場所で分けています。あまりにも返却期間を超過している場合はご連絡しますが、最近ではそこまで厳しくはしていませんね。最近は子どもだけではなく、大人も利用して借りていく人が増えてきました。そして、この利用カードにはすでに諏訪原団地を出られた人なども入っています。一度、全部捨てようかと思ったのですが、なかなか捨てられなくて……。

石川：貸出方法は、この利用カードを使っていたのですね。本にポケットを付けて……。

坂井：最近では裏表紙にもきれいな絵や文字が入っているからポケットを付ける場所も難しくなりましたね。

石川：貸出方法は昔からずっと変わっていませんか？

坂井：ずっと変わっていませんね。

石川：この方法ですと返却された後は貸出履歴も残りませんね。

坂井：このカードを捨てずにとっておいて良かったこともあるんですよ。昔利用していたお子さんと、今では立派なお父さんになった人

が、あるとき自分のお子さんを連れて一緒に文庫に来たんですよ。それでお子さんが借りるときに、「あ、自分も借りようかな」なんていって子どもの頃に作ったカードを使って借りて行って（笑）。そうしたことが、何件もありましたね。「とっておいて良かったあ」と思いました（笑）。ここを利用する人の中には、親・子・孫と三代で利用する人もいます。おじいちゃん、おばあちゃんと来るときもあればお父さんやお母さんと来たりとね。

石川：新しく購入した本には、図書の装備としてまずはポケットをつけて、1冊ごとにカードを作るのですね。

坂井：それも一仕事なんです（笑）。

……（略）……

石川：本はどなたが買いに行かれるのでしょうか？

坂井：諏訪原文庫ではリクエストを受付けています。事務所のポストに入れていただいてもいいのですが、多くは直接お渡しいただいています。そうしたリクエストされた本を購入したり、続き物の本を購入しています。いっぺんに予算を使ってしまうと、新しく出た本が買えないのでやりくりしていますね。昔は団地内に子ども向けの本屋さんを経営している方が居住されていて、その方に頼んで購入して運んでもらっていたのですが、その方が転居されてからは市内の書店で購入しています。持ち帰る必要もあるので、だいたい3 - 4人で購入しに行きますね。

大谷：この本棚は二重になっていて、裏側にも本が置けるようになっています。

坂井：昔人気だったシリーズ物の漫画で、今はあまり利用が無くなったようなものは後ろの本棚に置くようにしています。

中岡：本の入れ換えや配置換えはされるのでしょうか？

坂井：新刊を購入していけば本棚に入りきらなくなってしまうから、本当は処分もしていかないといけないのですが、なかなか本は廃棄できないんですよ。



写真3 インタビュー当日の様子

(5) 諏訪原文庫の利用者

中岡：子どもたちが諏訪原文庫を利用する際の様子はどうなものでしょうか？

坂井：特に禁止しているものなどは無いですね。最初から最後まで借りないでずっと本を読んでいる子もいます。スポーツのクラブの試合の待ち時間に利用している子もいます。夢中になって本を読んでいる子もいるから、試合などを控えている子にはあらかじめ「何時からなの？」と聞いておくようにしています（笑）。私なんかは漫画でも読むのにある程度時間がかかりますが、子どもたちは読むスピードが速いんですよ。だからほんの2、30分程度の試合の待ち時間でも読めてしまうんです（笑）。

石川：子どもたちはみんなここが日曜日に開いているというのはよく知っているんですね。

坂井：最初は知らない子もいるかもしれないけど、お友達同士で伝わるみたいですね。

……（略）……

中岡：諏訪原文庫では、何かイベントを行うことはあるのでしょうか？

坂井：文庫としてのイベントは無いですね。でも、集会所で七夕の時は笹をもらってきて手作りの七夕飾りをつくったりすることはあります。文庫の半分くらいを使って、本の貸し借りをするとところと工作をするところという感じで、なんとなく分けて行われています。

……（略）……

坂井：昔は子どもばかりの利用でしたが、最近では良いことに大人の利用もありますね。だから10年近く前からは大人向けの本をリクエ

ストに応じて入れるようにしています。

石川：ちょっと歩いてこられるところに文庫があるというのが良いですね。

坂井：文庫に来れば、私たち当番もいますし、子どもたちもいますからしゃべることもできますしね。普段、家にお一人でいる方にも癒しとなれるのではないかと思います。古くからお住まいの方に聞いてみると、みんな最初は「諏訪原文庫というのは子ども向けの本しかないところだ」という印象だったようなんです。私は元々、「文庫の本は子どもの本」と決めつけなくても良いと思っていたこともありますから、「大人が読んでも楽しめる本がいっぱいあるからぜひ来てみたら？」と紹介していました。それで実際に足を運んでくださった方は気に入ってくださって、少しずつ大人も来るようになりました。

(6) 諏訪原文庫開設の頃

大谷：昔、先生方の「語る会」という集まりがありましたよね。

坂井：社会科の先生方が中心の集まりでしたね。文庫を最初に始められた方も一緒に、先生たちと勉強会をしていました。団地の住民もいるものだから、この集会所で勉強していたのだと思います。

中岡：諏訪原団地ではかつて川久保武子さんという方が様々な読書推進活動をされていたと聞いています。

坂井：まさに川久保さんはその中の熱心な方の一人でした。親子読書会の推進を熱心にされていました。川久保さんが中心となって色々な活動をされていました。大変なこともたくさんあったのだと思いますが、諏訪原文庫が今日まで続く基礎をつくってくれました。

……（略）……

中岡：その親子読書会というのはいつまで活動されていたかご存じですか？

坂井：読書会としては、そんなに長くは活動しなかったと思います。文庫ができて、本がだんだん増えていくとともに次第に活動が無くなっていったのだと思います。文庫ができたといっても、最初は段ボール数箱くらいの本



写真4 諏訪原文庫の書棚

しかありませんでしたけども。最初は「子ども文庫」と呼んでいたように思います。

中岡：文庫が充実していく中で、読書会としての活動が文庫の活動と一緒にっていったというような感じでしょうか。

坂井：読書会は有志が少数で集まって開かれるものでした。私も一度、川久保さんに誘われて覗く程度に参加したことがあります。

(7) 公民館図書室との関わり

石川：先ほど公民館図書室の本を借りていたことが記録に残されていましたが、その本は公民館図書室の職員が運んでくれたのでしょうか？

坂井：自分たちで運んでいたら記憶に残っていると思うのですが、記憶にないところを見ると自分たちでは運んでいなかったと思います。

石川：公民館図書室の本が来なくなったというのはいつごろでしょうか。

坂井：記録を見ると、1977年度に借りたのが最後だったようですね。

石川：貸出期間は1年間だったようですね。

坂井：ですから正確には1978年5月1日が公民館図書室の本を借りていた最後と記録されています。

(8) 諏訪原団地と移動図書館

中岡：諏訪原団地に移動図書館が来ていたことは記憶にありますか？

坂井：覚えています。子どもが利用もしていましたね。

中岡：どこに停車していたのでしょうか？

坂井：集会所の前です。集会所の前がちょうど団地全体のだ真ん中なんですよ。

中岡：大型バスを改造した県の一日図書館車と、その後、和光市の「やまびこ号」が巡回していたのですが、両方とも同じで場所でしょうか？

坂井：そうです。記憶にありますね。県か市かというのは当時意識していませんでしたが……。

…… (略) ……

中岡：「やまびこ号」には「世話人」という方々

が各ステーションにいて、お手伝いをしてくださっていたようですが、そのあたりのご記憶はありますか？

坂井：そうしたことは、川久保さんたちが何人かでされていたのを覚えています。机を出したりとか、色々なお世話をしてくれていたね。

石川：世話人の方々というのは、団地から選ばれたのでしょうか？

坂井：選ばれたというよりも、自発的なものだったと思います。文庫の活動とは関係なかったですね。

大谷：「やまびこ号」が来なくなってしまったとき、子どもたちがよく利用していたから理由を聞きに行ったんです。そしたら、「諏訪原団地は諏訪原文庫があるからいいでしょ」と言われましたね (笑)。

坂井：私もその話は川久保さんからちょっとうかがいました。「文庫があるからいいでしょって断られたのよ」ってね。「あるからいいでしょって言えるほどの文庫じゃないわよね」なんて話しましたね (笑)。

(9) 地域とのつながり

石川：和光市には西大和団地などさまざまな団地の文庫がありましたが、そうした方々とのつながりなどはありましたか？

坂井：個人的につながりはありました。そういう方々は幅広く活動をされているということもあって、同じような思いをもっている方と親しくなっていくということもありましたね。西大和団地のYさんなどもそうです。埼玉病院の小児病棟の読み聞かせというのをやることもありました。

大谷：社会福祉協議会のボランティアセンターに登録されていて、小児病棟の読み聞かせに行っていたいていました。Yさんが中心で、桐田さんなど数人のメンバーで毎週読み聞かせをされていました。

…… (略) ……

中岡：諏訪原文庫の活動をされていく中で、何か改めて思うところはありますか？

大谷：私は団地の中に文庫があることで、今で

も子どもたちとふれあえることが一番うれしいと思っています。ハリーポッターの本があるのですが、それを借りに来ていた男の子がいました。まだ小学校1年生くらいだったのに一生懸命読んでいたんです。思わず「漢字読める？」と聞いたところ、「お母さんに教えてもらったから」といって、頑張っている様子で読んでいて。今は中学生になっていますが、とても優秀なお子さんには育っているんですね。「あの時ハリーポッターを読んでいた子が、こんなに立派になって」と成長を見守ることができるのも、ここがあったからだなと思います。諏訪原文庫があることで子どもとふれあえるということは、本当に幸せなことだと思いますね。だから先輩たちには感謝ですね。

5. 地域文庫に流れる意志と思い

本稿では、西大和団地と諏訪原団地における地域文庫や読書会の活動を、実際に活動を担っていた方々へのインタビュー調査によって明らかにした。調査の過程において、地域におけるこうした活動は資料として十分に記録が残されておらず、地域住民の方々の経験と記憶が頼りであることも痛感した。

インタビューを通して明らかになったことは、文庫における選書や貸出方法の開発をはじめ、子どもたちや住民との日常的なつながり・声かけ、本を介した読書会の活動・イベントの開催などには、地域文庫を担う方々のエネルギーと地域への思いが流れていたことであった。こうしたエネルギーの源についてうかがったところ、次のようにお話しいただいた。

桐田：やはり、それは「子育て」だと思いますよ。

鈴木：私も「子育て」だと思います。

桐田：子どもたちに楽しんでもらおうとか、いろんな楽しい思いをさせてあげたいとか、そういう気持ちが根底にあるのだと思います。不思議と気が合う仲間同士がまとまっていくんですね。

ここから、地域全体で子どもを育み、母親らも子どもたちと一緒に学びあうといった地域・家庭文庫の理念をみることができる。同時に、日常生活の中に文庫がある意味を次のように語っていた。

大谷：本を借りに来る人の中にはチャレンジの方もあります。そういう方々とも文庫で自然にふれあえます。文庫が地域の中で色々な役目をたくさんしているなど感じますね。

坂井：今の諏訪原文庫のような一種の「たまり場」はやはり必要だと思いますね。もちろん、いつまでも変わらずに同じことだけを続けていけばいいというわけではないのですが、こういう活動がこれからもずっと続いていくということが私の願うところです。

地域文庫を媒介にしながら、世代を越えた人と人とのつながりや場所が再評価されていることがわかる。この当時、地域全体で学びを育み、世代を越えて地域社会の連帯を創造した活動のひとつが地域文庫であった。その一方で、移動図書館や貸出文庫（団体貸出）などの手段によって公立図書館（中央公民館図書室）が地域で活動を重ねていた地域文庫とどのように結びつき、どのような目的を掲げながら支援をしていたのかは、今後の課題として残されている。すなわち、公立図書館による地域文庫の位置づけが、移動図書館や団体貸出の方法を左右しているからである。今後も和光市における移動図書館を中心に、図書館が地域に果たした役割を考察していきたい。

■謝辞

文庫活動や読書会活動につきましてインタビューに快く応じてくださいました桐田光枝様、鈴木真由美様、佐藤あゆみ様、坂井和子様、大谷鐵子様と、資料を提供いただいた越ヶ谷トヨ様には深く御礼申し上げます。また、和光市教育委員会の茂呂あかね様、和光市図書館の小林理恵様にはインタビュー会場の提供や資

料の収集などにご支援をいただきました。改めて感謝いたします。なお本稿は、JSPS 科研費 JP20K02523 と、十文字学園女子大学プロジェクト研究による成果の一部です。

【註】

1. 石井桃子『子どもの図書館』岩波書店, 1965.5, p.210.
2. 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学会用語辞典』第5版, 丸善, 2020, p.151.
3. 同上, p.38-39.
4. 汐崎順子『児童サービスの歴史：戦後日本の公立図書館における児童サービスの発展』創元社, 2007.
5. 吉田右子「1960年代から1970年代の子ども文庫運動の再検討」『日本図書館情報学会誌』50(3), 2004.10, p.103-111.
6. 高橋樹一郎『子ども文庫の100年：子どもと本をつなぐ人びと』みすず書房, 2018.
7. 竹内愨『生きるための図書館：一人ひとりのために』岩波書店, 2018 (岩波新書, 1783)
8. 藤本浩之輔『子どもの遊び空間』日本放送出版協会, 1974. (NHK ブックス, 204)
9. 磯井純充『本で人をつなぐまちライブラリーのつくりかた』学芸出版社, 2015.
10. 中岡貴裕, 石川敬史「和光市における移動図書館の歩み：インタビュー調査中間報告」『和光市デジタルミュージアム紀要』6, 2020.3, p.1-12.; 石川敬史, 中岡貴裕「1970年代移動図書館史研究序説：埼玉県立浦和図書館における一日図書館を中心に」『十文字学園女子大学紀要』51, 2021.3, (印刷中)
11. 久井英輔「団地と社会教育・再考：高度成長期における都市住民の連帯をめぐる議論の一側面」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第3部, 66, 2017, p.21-30.; 久井英輔「高度成長期における団地の社会教育と社会調査：都市住民における集団, 共同性形成の契機に注がれた視線」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第3部, 67, 2018, p.17-26.
12. 上野景三「都市近郊団地にみる社会教育とソーシャル・キャピタル蓄積・展開の関連に関する研究(1)」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』18(2), 2014, p.1-16.
13. 原武史『団地の空間政治学』NHK出版, 2012. (NHK ブックス, 1195); 原武史『レッドアローとスターハウス：ほうひとつの戦後思想史』新潮社, 2012.
14. 渡邊大輔ほか『総中流の始まり：団地と生活時間の戦後史』青弓社, 2019.
15. 倉沢進編『大都市の共同生活：マンション・団地の社会学』日本評論社, 1990. (都市研究叢書, 2)
16. 東村山市立図書館編『文庫を生きる』東村山市, 1978. (東村山市民叢書) など.
17. 埼玉県編『新編埼玉県史』通史編7, 1991, p.719-720.
18. 和光市編『和光市史』通史編下巻, 和光市, 1988, p.734.
19. 同上, p.734.
20. 同上, p.813.
21. 同上, p.813.
22. 同上, p.822.
23. 前掲10), 石川敬史, 中岡貴裕.
24. 『広報わこう』13, 1971.5.1.
25. 埼玉県移動図書館運営協議会『埼玉の移動図書館1977：市町村移動図書館実態調査』1977, p.28.
26. 全国図書館埼玉大会実行委員会編『埼玉の移動図書館』1981, p.103.
27. ただし1964年は西大和団地の建設がはじまった年であり、入居が始まるのは翌年の1965年からであること、そして後述する川久保氏の記録を踏まえると実際に文庫としての活動が開始されたのは1965年であったと考えられる。
28. 前掲26), 『埼玉の移動図書館』p.104.
29. 『広報やまと』173, 1970.7.1.
30. 『広報わこう』42, 1972.7.15.
31. 川久保武子「親子読書会から移動図書館請願運動へ」『月刊社会教育』17(4), 1973.4, p.82.
32. 前掲18), p.734.

33. 前掲 31), 川久保, p.82.
34. 同上, 川久保, p.82-83.
35. 「昭和四五年」の誤植であると考えられる。『広報わこう』(4, 1970.12.1)によれば1970年に「児童文学を読む会」が西大和団地集会所で行われており、埼玉新聞(1978年8月1日)によれば中央公民館で1970 - 1971年に児童文学講座が行われ、これをきっかけにありんこ読書会が発足したとされていることから、1974年では明らかに矛盾する。よって、昭和45年(1970年)の開催と考えて相違ないだろう。
36. 「ことしで8年目 和光市西大和団地「ありんこ読書会」自治会文庫の運営など活発な実践活動に成果」『埼玉新聞』1978.8.1.
37. 「第十三回西大和ありんこ親子読書会総会資料(1983年7月18日)」は、元ありんこ親子読書会メンバーの越ヶ谷トヨ氏より閲覧の機会をいただいた。
38. 『ありんこだより』についても越ヶ谷氏より閲覧の機会をいただいた。確認できたのは120号(1983年3月10日発行)～181号(1990年3月14日発行)である。※一部欠号あり
39. 前掲 26), 『埼玉の移動図書館』
40. よしだきみまる『しんぶんしでつくろう』福音館書店, 1989. (かがくのとも, 241)
41. 前掲 18), p734
42. 前掲 26), 『埼玉の移動図書館』 p115
43. 坂井和子氏のご教示による。
44. 前掲 31), 川久保, p84
45. 『広報わこう』(15, 1971.6.1.)によれば、ねらいは「親と子がいっしょになって読書をして、その中からおたがいのほのぼのした心の結びつきを求め、あたたかい愛情で、子どもの限りない可能性をはぐくんでいただくとするもの」であり、1971年7月～9月の間で全10回行われた。
46. 前掲 31), 川久保, p85
47. 「<すわはら文庫>運営の手引き」と題した手順書で、運営や当番の役割等について記されている。坂井和子氏提供による。

なかおか たかひろ (和光市)

いしかわ たかし (十文字学園女子大学)